

課題について

原 宏

仙台大会の雰囲気に違さねばならないといふ所感を誰からか聞いた。この言葉の中には、単に「マルな学会ではない筈だ」という意味が含まれていると思う。来年度の共同課題についても色々討議され、一定程度まで集約された形の中で今後に持越されたが、懇親会を得たので小案を提起したい。

兼業農家乃至農家兼業の「バイールド」。ワーカーは由来主として農業経済学的分野からなされ、小池氏「日本農業構造論」、野尻氏「農民離村の実証的研究」を初め貴重な報告も少くない。然し比較可能な同一次元的な文献はそう多くないと言わねばならぬ。況んや社会学アプローチにおいては見るべきものは殆んどないといつても過言ではない。にも拘らず、最近の研究報告はとみに兼業農家乃至農家兼業の問題を副次的、派生的にせよ成ったものが多くなつた。地理学会でも昨年の共同課題として「近郊村」を取上げたようである。尤も兼業農家乃至農家兼業といつても、農林統計でいう概念は極めてドライに扱つて来てゐるが、これは飽くまでも「農家」という神産業を兼ねる、即ち「農家」が農業以外の産業を兼ねるという規定の中で成われてゐる。從つて農業を専業とする農家に対比するといふ基点に立つて「農家」として操作されてゐる。然るに農業を兼業するもの、つまり「農

家」という枠を適用する以前の問題を考えることが必要であろう。即ち一反以上、五畝以上の産業を兼業している所謂「兼業農家」であるというような考え方ではなく、「農家」という概念を所謂「専業農家」だけに限定して考えてみる。専がこの「農家」以外にも農業を兼業している家族がある。この家族が農村において、特に「アーバン・ロジスティクス」においてどの様な地位、役割、機能を果しているか、果して農家であるか否か、農家であるとすれば如何様にして農家であるのか、又所謂専業との絡み合いはどうなのかと、いうような事がから考える。安易に言つてしまえば農業を営業する家族を把握すると、いう観点に立つて考え、所謂「兼業農家」の概念規定をも再考する。このような意味を含めて近郊村における所謂兼業農家の分析を提案する。各大学、研究機関の所在地と会員の在住地との関係から言つても、統計調査も容易であろうと思う。そしてこの課題も二年懸続とし、来年は敢えて調査のデザインを定めないで、大会における研究報告をまつて討議の上、再来年はデザインを決めるか又はアイデムを統一するという方法を探つてはどうだろうか。村研のような乗りこそ、かかる共同研究で、ため全国的に比較研究出来る方針と資料を生みだすべきだと思う。